
闇の剣 ~ 愛しき殺意 ~

葛城 炯

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

闇の剣 ～愛しき殺意～

【Nコード】

N7534D

【作者名】

葛城 炯

【あらすじ】

約束⇨契約が絶対視される世界。ギルドの依頼を受けて糧を得ている剣術士、双鋼玉眼のエアリエス。老將軍相手に仕事をしている彼女の前に顕れたのは人形遣いのグレイ。グレイは彼女が昔、約束を交わした少女であると確信し、思い出させようとするが、それはエアリエスに掛けた呪詛を発動させる鍵だった。呪詛を封じ込め、安心したグレイと呪詛をが在った事を知らないエアリエスの前に現れたのは老將軍。將軍を闇の勢力に与させる約束。それがエアリエスが取った言質だった。將軍の攻撃に打ち倒されるグレイ。だがグ

闇の剣 ～愛しき殺意～

レイの最後の力がエアリエスに無敵の力を与た。エアリエスはグレイの復活を信じて旅立つ。愛しき殺意との遭遇を信じて。

愛しき殺意 1

1. 約束

「…約束しましょう。これも間違いなくあの子にお渡し致します」
若き僧侶が受け取ったのは聖絹の包み。包みを渡した少女が僧侶に誓った。

「アタシ…妹が戻るまで剣を使わない。剣術大会になんか…もうでない！」

「どうしてですか？」

静かに尋ねる若き僧侶。

「だって…アタシが優勝なんかしなければ…王宮に招かれなければ…妹が…あの子が……」

少女の後悔が涙となつて溢れ出る。

「…あ聖宝を、光の杖を掴むなんて事…無かつたんだ」

少女の後悔を敢えて無視して僧侶がにこやかに笑つて応えた。

「駄目ですよ。この戦乱の世であなたはあの子が戻るまで帰る場所を守って頂かねば……」

僧侶の言葉を、諫めを聞き逃したかのように、少女は視線を合わせない。

「大丈夫。すぐですよ」

「え？　すぐ……なの？」

僧侶を見つめる少女の両の碧い瞳から未だ溢れる大粒の涙。無垢な涙に叱責されたかのように若き僧侶は言葉を続けた。

「ええ。すぐです。そうそう。あの子からの伝言です。『必ず会いに行くから』と。『何が在っても、この世が在る限り。魔王を討ち滅ぼしてでも必ず会いに行く』と……」

「ほんと？」

「ええ。本当です。『魔王を打ち倒して会いに行く』と。約束の言葉を私に託してあの子は光の寺院へと旅立ったのですよ。だから、

あなたはあなたのまま。剣術に精進して…あの子が戻るべき場所を守っていかなければなりません。いいですか？ 約束ですよ」

「うん。判った……」

少女は涙を拭い、そして在ることに気がついたように声を上げた。「そうだつ！ アタシがもっと強くなつて…強くなつてアタシが魔王を打ち倒したら…帰ってこれるんだよね？」

少女の言葉に若き僧侶は驚き、そして笑った。

「魔王を打ち倒すんですか？ ははは。それは私達に任せてください。大丈夫、魔王なんかを復活させません。約束します。そうすれば…あの子はあなたの元へと帰ることが…」

「ほんとう？ じゃ、アタシ…待ってる」

少女は僧侶に諭されて笑顔を取り戻し、涙を拭くと門の外で待っていた家族の下へと走って行った。僧侶の言った言葉の意味を深くは理解せずに。

若き僧侶もまた深くは考えずに約束した。既に行ってしまった在る事への懺悔かのように。二人の少女と…三つの…いや、四つの約束を。総てを適えるのは無理と判っている約束。

そして見送る僧侶の顔にはある決意が顕れていた。人生の方向を変える決意が…

2. 殺戮者

「ぎゃあああああ…」

深い森に囲まれた草原に初老の男の声が響く。

白銀の鎧に上質の銀絹のローブを羽織る白髪の初老の男が血みどろになりながら片腕を抱えて叫び、転げ回っていた。何一つ傷ついてない白銀のフルアーマー。しかし、その継目から滴る鮮血は鎧の中の腕が無惨に刻まれた事を物語っていた。辺りにも呻き、蠢くブガレード（上半身だけの鎧）の男達。草原の一角を赤黒く染める飛び散った血糊が惨劇の総てを物語っていた。

その中で…ただ1人、無傷の双剣の剣術師が呟く。

「不甲斐ない。それでは甲冑が啼くだろうに……」

男達の銀のブガレードに飾られた金の象眼の呪紋様。さらに鎧の上に羽織っていたであろう白絹に金糸で刺繍された豪華なマントの呪紋様はともにレガス国の警護兵の証。しかも、かなりの身分の者につく警護兵と見て取れる。ただ、今は総ての兵が血の海に転げ回り、鎧とマントは血泥に汚れるままになっているのは無様の一言に尽きた。時折、鎧とマントの呪紋が光り輝き、染み込もうとする血糊をその呪力で防いでいる様はただ一人の剣術士に倒された主人達の無能さを嘲笑っているようだった。

そして…草原の彼方に悲鳴をあげながら逃げ去る人影も同じ警備兵達。

「…主人を見捨てて逃げるような兵士がアタシを倒せるとでも思っただのか？ 將軍」

今は息荒く苦痛に耐える初老の將軍に、静かに歩み寄る双剣の剣術士。鎖が中に織り込まれているであろう樹綿のロープはかなり草臥れ、その上に重ねる同じ造りであろうケーブ（フード付の胸までのコート）もまたかなり使い込まれたもの。戦場に身を投じるには余りにも軽装な身形は相手が賞金稼ぎであることを…しかも手練れの賞金稼ぎであることを物語っていた。

樹綿のケーブを深く被っているために賞金稼ぎの剣術士の顔はよく見えない。それでもケーブから流れ出る濃い金髪の奥に輝く瞳は將軍にもよく見えた。片方は血の海のように赤黒く、もう片方は澄んだ空のように碧玉の色。身形や声からしてまだ若い女のように…しかし、今見せた剣技は百戦を闘い抜いた男…レガス国の老將軍でさえ見たこともないほど凄まじく氷嵐のように容赦ない。鬼神の如く、夜叉の如く…魔に魅入られたような強者。

（それほどの使い手ならば知らぬ筈がないのだが、…誰だ？）

將軍は痺れるような痛みの中で相手の正体を見極めようとしている。それは長年、戦場に棲む者の慣わしともいえた。

（太刀筋ならば記憶にある。…確か『反逆の傭兵』の太刀筋）

双方の片目の下に逆さ十字の傷痕のある…反逆の双剣術士と呼ばれた兄妹の傭兵。

(しかし…あの女の方だとしてもまだ若すぎる…それに…)

二つの剣を構える姿は独特のものだ。片腕で正眼に構えているのは正統といえは正統。だが、右腕は…刃先を背に回すかのような片八相…いや、八相崩しの右上車か。双剣の剣術士は傭兵には多いが、それでも見たことのない構え。

携えている剣も…左の剣が長刃のソードブレイカーというのも珍しいが、右の剣…刀身が漆黒の闇のような一片の光すらも返さない黒き剣は見たことはない。

その黒き剣が、自分が装備している鎧をもろともせず中腕を切断した。

(目的が命ならば…暗殺ならば既に我が命はない…目的はなんだ？
痛みの中でも相手の目的を訝った。

「わ、わかった。御主の狙いはなんだ？ 我が命では在るまい？
なんでもやる。命だけは助けてくれ…」

無論、將軍の本意ではない。卑しくも一国の将であり軍を指揮する技量と度量の持ち主である。相手の目的を探る為の…下手な芝居であった。

「確かに…貴様の命なぞいらない」

愛しき殺意 1 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

16話で完結します。

投票、感想など戴けると有り難いです。

愛しき殺意 2 (前書き)

鬼神の如く、
夜叉の如く…
魔に魅入られたような双剣の少女剣術
士の正体は…

愛しき殺意 2

剣術士はソードブレイカーを地面に突き刺すとローブの袖口の中の仕込みポケットからネックレスを取り出した。鍍銀の鎖に下げられた石、濃い紫に金の虎縞模様の水晶を將軍の前にじゅらりと突き出して命じる。

「…さあ。今一度、約束してもらおうか。將軍。『領土を明け渡す』と」

「ぐつ。それか。…それだけは…できぬ」

苦痛よりも屈辱に顔を歪ませて拒否する。初老の將軍は目の前の凄腕の剣術士の目的を理解した。有り体に言えば博奕の取り立て。しかし、それには従う訳にはいかない。將軍は普段から命を遣り取りする者達特有のあまり誉められない性分の一つとして…博奕好きだった。それでも自身の信仰する宗教上の理由から色に溺れるよりはいいと勝手に決めつけて省みる事はなかった。

(あの賭けなぞに乗らねば…)
今思い出しても悔やまれる。

「…あれはただの戯れ言。従う謂はない」
「賭けの前に約束したのだろう？ この世界では約束は絶対だ。違うか？」

それは事実。剣と魔法の渦巻くこの世界。今日の勝者が明日の屍ともなる戦乱の世で確かな物は『約束』。つまりは契約だけが世界の総てで通じる唯一の法だった。

それでも…逃れる術を思い描く。何故ならば…その賭けをした相手は敵。

賭けの後に身分を明かしたその相手が敵国、新進気鋭の軍事国家オーヴェマの戦略参謀の一人だったからだった。

(このままでは、我が武名に傷がつく…しかし…逃れる術は…)

博奕で国を滅ばした將軍。語り草になることは間違いない。…侮

蔑の対象として。

(あの賭けに乗った…乗った事が総ての結末なのか…)

髪の中から剣術士の冷たい瞳が心を見透かすように見据えている。
「言え。言わぬと残りの腕も…刻むぞ」

剣術士の静かな脅しに覚悟を決めたのか、將軍は相手を睨みつけた。

「ふん。言わぬ。見事にこの胸をその剣で貫き、この老命を奪うが良い。時を置かずには逃げた者達の知らせで援軍も来よう。貴様の命もそれまでだ。自らの命が惜しくば、今すぐこの場を去るがいい！」
剣術士は凍りついた視線で身動きもせず静かに冷たく詰寄り脅す。

「死をもって約束を違えるか？ 無駄なあがきだ。さっさと言え。

『約束に従う』と。或いは『領土を明け渡す』と」

「ぐうぬう」

痛みよりも屈辱よりも己への憤怒で將軍は顔を赤銅と化していく。
「そうそう。さっさと言っちゃってくださいな。そうすりゃ斬り刻まれた腕も癒してさしあげられますよ。シュタイン將軍」

緊迫した空気に呆けた声を挟んだのは…森の影から現れた僧侶。
薄汚れた僧衣を纏い、呪紋が刻まれた小さな木の箱を担ぎ、棒きれのような杖を引きずっている痩せた男だった。

「誰だ！ 貴様は？」

シュタイン將軍が気丈にも太い声で尋ねる。問いに応えたのは、
今、將軍に詰め寄っている剣術士だった。

「あいつはグレイ。ただの人形遣いだよ。將軍」

剣術士の呆れたような声を意に介さずに痩せた男は挨拶を返した。
「お久しぶりですね。またお逢いできるとは…これも神の思し召しでしょう」

杖を引きずりながら人形遣いは態とらしく天を仰ぎ、恭しく手を
広げて感謝のポーズを取った。

「神だつて？ 神の意に反する人形遣いが何を言ってるんだか。また

邪魔しに来たのかい？」

「いえいえ。お邪魔はしませんよ。そちらの御老体に野暮用が在るだけで……」

人形遣いという言葉に將軍は動揺していた。魂を操り、思いのままに人の生死を、或いは意志を操るといふ人形遣いという下賤な輩を目の前にして平静を保てる者は少ない。將軍もまた普通の感覚の持ち主であった。

「に、人形遣い？ 魂を盗りに来たのかっ！」

「やだなあ。貴方様の残り少ない薄汚れた魂にも、かなり動きが鈍くなったその身体にも興味はありませんよ。ギルドに依頼したでしょう？ 刺客に狙われているから助けになる者を……剣の警護は足りているから白魔術か黒魔術が使える者をよこせと。だから、私が来たんですよ」

人形遣いは杖を地面に引きずりながら近づいてくる。だが、剣術士が居る方向は避けて、ぐるりと血に染まった地面を回って將軍の背後に座り小声で促した。

「さあ。さっさと行ってくださいな。そうすりゃ、彼女も引き下がりますから」

「貴様、助ける為に来たのだろう？ ならばこの者を倒せ。さすれば褒美を……」

人形遣いは小さくにやりと笑う。

「お断りしますよ。例えば私が如何なる高僧……いえ、白でも黒でも、考え得る最高レベルの魔導師、魔術師であろうともですよ、どんな障壁をも簡単に打ち砕く『闇の剣』の使い手に敵う訳がないでしょう？ 博奕好きの將軍さま」

「闇の剣？ あれが……すると、ヤツは……」

片腕を押えながら剣術士を睨む將軍。

「そう。あれが硬質化した幽体の刃を持つ闇の剣。そして彼女の通り名は『双鋼玉眼のエアリエス』。聞いたことがあるでしょう？ 少なくとも暗闇の魔剣術士の名は？」

「う、ぐ……」

闇の剣…將軍ですら実在するとは思わなかった魔剣。

手にした者は魂を吸い取られ、ゾンビとして魔剣の意思のままにあらゆる者を斬り捨てるといふ…伝承の中でしか存在しないと思っていた魔剣。少なくとも自らの意志でその魔剣を振るう者が顕れるとは思ってもいなかった。

愛しき殺意 2 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは2 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

愛しき殺意 3 (前書き)

怪しき人形遣いの術が闇の剣に放たれる。だが……

愛しき殺意 3

暗闇の魔剣術士？

最近、耳にする傭兵。いや、暗殺者。

たった一人でこの大陸最大の国家、エムル国の財務大臣を千人余の私兵と共に亡き者にしたとの伝聞は噂として聞いていた。…あり得ぬ事としての風説、噂話と考えていたのである。

ふらりと立ち上って人形遣いはゆっくりと歩き始めた。

剣術士に近づかないように。

苦痛に蠢く警護の者達の間を顔色一つ変えずに。

血の海の腸を踏みしめて。

杖を引きずりながら…一歩進む度にぐちゃり、ぐちゃりと嫌な音が辺りに響く。

その音を背景に人形遣いの飄々とした場違いな声が草原に響き渡る。

「將軍。どんなに偉かろうと今は風前の灯のような御命なのですよ。ほおら、警護のものはこのとおり、鎧の上から闇の剣で斬り刻まれている。その剣の力は御自身でも身に染みているでしょう？ その剣はどんな鎧もどんな障壁をも物ともせず中身を刻む事ができますよ。私のような白魔導師崩れの人形遣いにどうにかできる相手じゃないんです。ましてや博奕で御自身の領地を賭けて、剩え銅貨どころか鉄貨ひとつ残さず負けた將軍に国王が援軍をよこすとお思いで？ 逃げた者達の言葉に国王が耳を貸すとは到底、思えませんか。つまり將軍には私のような下賤の者しか援護に来ないので。よ。御判りで？ 將軍さま」

一周して再び將軍の後ろに座ると、囁くように促した。

「だから、さっさと言っちゃってくださいな。『約束は守る』と…ね」

「…貴様。それで助けに来たつもりか！ ギルドに履行違反で抹殺

されるぞ！」

その言葉に人形遣いはびくりとして顔が引きつる。

「…私の契約内容としましては『負傷した場合の治癒だけ』として来たんですがね。そちらの依頼内容は違いましたか…」

不満そうに呟く様子を見て將軍は確信した。

人形遣いといえどギルドという闇をも司ると言われる組織には敵対できぬのだと。將軍は剣術士に聞かれぬぐらいの小声で人形遣いに命じた。

「人形遣い。白魔導師の端くれならば『剣を砕く術』が使えるのだから？」

その術は簡単なものではない。しかし、戦場で一流の魔導師だけを見て来た將軍には簡単な術という認識しかなかった。

「剣を砕く術ね…高価いですよ？ 追加注文ですから」

「我が命よりも高価いと申すのか？」

不敵に笑う將軍の言葉に人形遣いは仕方なしに立ち上がった。

「はいはい。判りましたよ。やればいいんでしょっ！ 聖光陣っ！」

人形遣いは呆れきった声で応え、即座に背後に飛んだ。

杖で呪紋を空中に描き、着地と同時に杖を地面に叩きつける。

ただの棒きれの杖が光り輝き、先程、引きずり歩いた軌跡に煌き浮かび上がる聖なる呪紋。そして呪紋様の光の中から剣が折れ砕かれる音が響く。

「おおお…」

さああつと光が消え去った後には…腕や足、さらには胴を斬り刻まれ…つい先程まで苦痛に蠢いていた警護の者達が不可思議な面持ちでゆっくりと立ち上っていく。身体の内側をゆっくりと蛇に喰われ齧られて居たような悍ましい苦痛が総て消えている。訳も判らぬまま、身体を確かめると鎧の上から刻まれた腕や足、腸さえも癒っている。

杖でとんとんと自分の肩を叩いて、人形遣いは飄々とした声で説明した。

「オマケに治癒の術をブレンドしておきましたよ。將軍さま」

「おおっ！ 流石じゃ」

喜ぶ將軍。敵は人形遣いの術の光に未だに包まれている。術の効力が剣術師の剣を打ち砕いたと期待していたが故に……

「でもねえ。たぶん… あんにも状況は変らんですけどね」

叩きつけた棒きれの杖の傷を確かめながら、人形遣いはこの先の出来事を憂いた。何故ならば… 警備兵達の次の行動を見抜いていたが故。警備兵達は自らの身に起きた出来事を何一つ理解してはいなかったのである。

「…え？ 何が…？」

「なにが？ 癒っている…？」

「そうだ！ 將軍は？」

それでも自らの責務を思い出し、慌てて剣を取り將軍の防護に回ろうとした。が、拾い上げた剣は… 砕け散り、柄しか残っていない。

そして敵は…

闇の剣を持つ剣術士は… 今、この時まで光の呪紋の鎖に包まれていた。… が。

「はっ！」

気合いと共に振り上げられた漆黒の剣の一太刀で呪文の鎖が断ち切られて光が四散していく。後には、何事も無かったように佇む剣術士と何も損傷を受けていない闇の剣があった。そして… 腰に下げた鞘からすらりと抜かれた無傷のソードブレイカー。

「ほおら。彼女は術の意味を知っている。鞘の中の剣には役に立たないんですよ。聖光陣という術は。大抵は… どんな些末な剣の鞘でも対魔呪紋様が飾られてますからね。それに…」

ひらりと手で闇の剣を指して言葉を続けた。

「あの闇の剣は大抵の法術を解呪する… というか根本的に効かないんですよ。硬質化しているとはいえ刃自体が幽体ですから。私のような白魔導師の端くれ如きの法術ではなあんの役にも立たないんですよ。納得していただけましたか？ 將軍さま」

「ひ、ひいいいいい……」

人形遣いの指摘に悲鳴を上げたのは警備兵達。

柄だけになつた剣の残骸を放り出し、その場から蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく。勝ち目のない事を悟つた者の生存を目指した無理からぬ行動である。その姿を溜め息混じりに將軍は見送つた。

「…根性無し共め。あれでは…戦いには勝てぬ」

如何なる傷をも即座に癒す白魔導師がいれば一介の兵卒も無敵の剣術士となる。剣が折れても多勢に頼んで一人しかいない敵を組み敷く事も難しい事ではない。しかし…自分達が「無敵」となつた事すらも理解できずに、ただ恐怖に心を縛られて警備兵達は一目散に逃げていく彼らに戦に身を投じる戦士の誇りは微塵にも無いことだけは確かだつた。

「当然でしょう？ 先の戦から既に20数年。戦いに身を踊らせる勇者が貴方の国に居るとお思いで？ 今も治癒の術を使える者が此処に居るといふのに、さつさと逃げ出す。警備兵がですよ？ これでは軍事国家オーヴェマに呑み込まれるのも自然の摂理というヤツですよ」

「そうか…自然の摂理か…うあつ！」

身じろいだ將軍は右腕の痛み思わず声をあげた。

「ありや。右腕を陣の外に置いてましたね。將軍さま。それではまだ斬り刻まれたままですよ」

右腕を覆っている白銀の鎧の隙間からはまだ血が滴っていた。

「そろそろ、出血で気絶なさいますよ。その前に…うわあつと！」

愛しき殺意 3 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは3 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 4 (前書き)

仕事の後、少女は闇の剣と共に……

愛しき殺意 4

飄々と説得する人形遣いの鼻先に突きつけられた黒き剣。

「暫く黙ってる。グレイ。こっちの用事が済むまでな」

「はいはい。こっちの仕事は一応、粗方済みでしたから、そちらの仕事もさっさと済ませてくださいな。それまで杖の手入れでもしますから」

そそくさと数歩退き、棒きれの杖を後生大事とばかりに手入れする人形遣いに一瞥をくれてから、魔剣術士エアリエスは紫水晶を突き出して将軍に詰め寄る。

「まだ、言う気は無いのか？」

「…わかった。宣言しよう。『あの夜の約束に従う』と」

約束の言葉が発せられた途端、紫水晶にさあっと一筋の金の筋が一つ入った。

「言葉は受け取った。グレイ！ さっさと癒してやんな」

ソードブレイカーを鞘に収め、黒き剣を水平に構え、森のほうに切っ先を向けて小さく呪文を唱えると魔剣術士に向かって禍々しい形の漆黒の鞘が飛んで来た。鞘は自ら意思を持ったかのように剣の中に納めると、鞘に付けられた黒き鎖が剣を抜けないように巻き付いていく。一見すると禍々しい十字架の杖にしか見えなくなった剣をローブの中に納めて、彼女は振り返りもせず立ち去っていく。

「あれは…確かに魔剣。剣どころか鞘さえも意志を持っているとは…」

「そうですね。千年余の昔、撃ち破られた魔王の牙から削り造られたという文字どおりの魔剣なのです」

治癒の術を施しながら見送る人形遣いのグレイの眼にはある思いが宿っていた。

そして、治癒の術を施されているシュタイン将軍の眼にもある意志の炎が灯っていた。

黒き炎が…

3. 過去への夜

その夜。

既に追われる身でもあるエアリエスは街道から少し外れた森の中で夜を過ごそうとしていた。無言で火を熾し、背の太木に身を預けて暖をとる。ケープを外し、髪を掻上げると左顔に残る傷痕が揺らく炎に照らされる。

淑女と呼ぶにはほんの少しだけ早い少女の美しい横顔にくつきりと浮かび上がる。額、いや眉のあたりから頬にかけてギザギザの傷が三条。その傷をおさえて、指の間から炎を蒼き瞳が見つめ続ける。何故か…その仕草で落ち着く心。

(…明日には街に戻るな)

報酬を受け取る為には、街に戻りギルドに行かなければならない。(…追っ手は来ないとは思いが…来たら…斬らねばならぬのか…また)

請われて人を殺めた事はない。だが、自らの身を守る為に幾多の身体を斬り刻んだ事か…

既に幾多の賞金が懸けられている命。息一つ慎重に吸わねば即座に首を掻かれる日常。

(…疲れたな)

蓄積した疲労で身体が重い。

いや、心が重い。

何のために生きているのか。何処に行かねばならぬのか。何一つ判らない。思い出せない。

(この剣を……に渡す為だけに。でも…これからどうすればいいのだろうか?)

傍らの剣。禍々しい鞘に納められ、さらにボロ布を巻いて今はただの荷物にしかみえない魔剣「闇の剣」。そのためだけに生きている。

(…捨てていくか)

今まで何度思った事か。

しかし、それを捨てたら今は、辛うじて存在する目的をも捨てる事になる。

捨てようとするすると頭が…頭の芯が重くなる。

(…疲れた。ほんとうに…つかれた)

空を仰ぐと蒼き月と紅き月が近づき重なるうとしていた。

(もうじき、「一月」の季節か…。あれから何度目の「一月」だろう?)

この魔剣を預かった時も一月だった事をぼんやりと懐かしみ…何故か不快をも染みる心地で思い出していた時、不意に背後で声が出た。

「お邪魔しますよ」

振り向くより早く懐の短剣を声の方へと弾く。

手応えは？

いや、それを確認するよりも素早く相手の反撃を防ぐべく脇に置いた護身剣、長刃のソードブレイカーをすらりと抜き、構えた。

「危ないじゃないですか」

闇の中から姿を現したのは…グレイ。

見れば…杖にさげ持つ飛兎に投げた短剣が突き刺さっている。

「なんだ。グレイか。エムル国からずうっと付きまとって…何の用だ？」

安堵の息を冷たい言葉と視線に変えて問い質す。

いつも敵側に付き、敵を片っ端から癒していく。はっきり言って仕事の邪魔。鬱陶しいだけの相手だった。

「また邪魔しに来たのかい？」

詰問を人形遣いは剽げた身振りで流し、応えた。

「やだなあ。そちらの仕事はさつき終わってたじゃないですか。貴方の仕事が終わったのなら私の仕事も終わり。今は単なる同業者ですよ。ギルドの依頼を糧にする…ね」

「糧ね。アンタは違うだろうに…」

エアリエスが冷たく睨んでいるのを全く気にせず、グレイは飄々と応えた。

「そうそう。さっき、捕まえたんですよ。コレ。私は刃物が扱えませんが、せんにから捌いてもらえませんか？」

白魔導師は刃物の類が一切扱えない。

使うことはおろか持つことさえできない。それは光の術とされる白魔術を駆使するために自らに科した戒め。刃物と認識した物に触れた手に紅蓮の炎を生じさせてしまう自戒。免れる方法はただ一つ。聖絹という法力を織り込んだという布越しに触れる事だけだった。

「アンタは白魔導師崩れの人形遣いだろ？ 包丁ぐらい持てないのかい？」

冷たい視線を呆れた溜め息に変えてエアリエスが毒づいた。

「残念ながら崩れても元は白魔導師なもので刃物は持てないんですよ。この獲物は焚火にあたらせてもらおう引き換えということはどうです？」

愛しき殺意 4 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは4 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

愛しき殺意 5 (前書き)

少女の前に顕われた人形遣いグレイの目的は…

愛しき殺意 5

さつさと焚火の前に座るとグレイは杖ごと飛兔をエアリエスに渡した。

「私は先程、食事を済ませましたから。それは遠慮無くどうぞ」
人形遣いの食事。それは…

「さつきの聖光陣とかいう術を掛けながらも…兵士達から『寿命』を喰ったんだろ？」

グレイはニヤリと笑って焚火に手をかざす。

「喰ったとは人間の悪い。法力の源を少しばかり拝借しただけですよ」

「法力の源ねえ…。喰われた相手は寿命が縮んでいるだろうに」

「それも天寿というヤツですよ。運がよければ全うできるし運が無ければ全うできない。そんなモノが少しばかり欠けても大差無いでしょう？」

「勝手な言い分だね。魔王みたいな理屈だ」

「魔王…は嫌いですか？」

何故かグレイは慎重に尋ねた。

「ふん。勝手に復活して全てを破壊する？ 勝手極まりない。約束を守らないヤツも、そんな勝手なヤツも大嫌いだ」

約束を守らないヤツとは…さつきの老將軍の事だろうか。

愚痴を言いながらもエアリエスはさつさと短剣で飛兔を捌いていく。袖口の中に仕込んでいた紫銀の金串を取り出し、肉に打つ。程よく焼ける位置を見計らって串肉を地面に刺して焙り焼きにする。
「手慣れたモノですね」

何故か安心したような口調でグレイが呟く。

「ん？ ああ……に仕込まれたから」

「誰にです？」

どくん…

エアリエスの頭の中で痛みが鼓動を始めた。

「誰だつていいだろ！ アンタも喰うんだろ？ 破戒僧なら肉も平気だろ？ ごちゃごちゃ言ったらあげないよ」

痛みを無視するかのように少女は言葉を吐き散らした。

「え？。頂けるモノならば頂きますが…一つ聞いていいですか？」
「何をだい？」

凄まじい眼光で睨むエアリエスにグレイはたじろぎ、戯けて聞き直した。

「えっ。いや、あ…はははは。いやなに。その剣はどうして手に入れたのかなあつて。前に尋ねた時も教えてくれなかったモノですから、気になつてたんですよ」

大袈裟な身振りで闇の剣を指し示し、問いを投げる。

「この剣？ 『闇牙』の事かい？」

エアリエスは大袈裟な身振りに醒めた視線を投げながらも…問いに応えた。

「『ダークフアング』？ その剣の名前が？」

「そう言つてたよ。お婆はね…」

「お婆？ …どなたです？」

「アタシを育ててくれた…そして、この剣を一族に渡してくれつて頼まれたのさ。今際の際にね…」

「一族？ …どこの部族です？ 部族の名は？」

似合わぬ真剣な顔でグレイは尋ねた。

「知らない。…闇の一族だと言つてたけど…何処に居るのかわからない…アタシが剣を…いや、剣術士として仕事を…ギルドの仕事を…続けていれば逢えると…言つてたけどね。それしか知らな…い…」

「そうですか…ところで、そのお婆つて、…うをわっ！」
不意に鼻先にソードブレイカーが突きつけられた。

「何を考えているんだい？ グレイ？ ……ぺっ」

エアリエスの唇から砕かれた小さな紅い木の実が吐き捨てられる。それは口の中に予め仕込んでいたグジュマの実。噛み砕くと瞬間的な覚醒薬となり、多用すると毒薬でもある魔樹の実。普段から追われる者としての生活の知恵だった。

「い、いや…何も」

「だったら…何で沈我香なんぞを焚いているんだい？ ん？」

沈我香とは一種の麻薬。鎮静効果があり、簡単な自白剤としても利用されていた。だが、大概の場合においては忘れた事を思い出す程度の軽微な効果しかない。

グレイは座り込んだ時に手の中の香をエアリエスに気づかれずに焚火の中に放り込んでいたのである。

「えっ？ あ、いや、はははは。これは襲われないようにですよ。

ほら、お互い賞金首でもあるじゃないですか。この香を焚いている間は襲われずに済みますからね。いや、ほんと」

実際、賞金首狩人や盗賊の類は昂進薬の類を服用している場合が多い。そういう者達にはこの香が相乗効果で幻覚を引き起こすのである。また、鎮静効果のある薬物を服用していた場合には強烈な睡眠が襲うという結構、便利な香であった。

「そうか？ なんだか尋問くさかったけどね？」

「いや、はははははは。あっと、肉が焼けたようですよ。ほらっ。あじっ、熱っ」

慌てて串肉を取上げたグレイは熱せられた串の熱さに思わず放り上げてしまった。串肉はゆるやかに弧を描いて空を舞い、不意に軌道を変えて後ろの樹に突き刺さった。

エアリエスの投げた紫銀の串が串肉を突き刺し、樹に刺しつけたのである。

「ははは…どうも」

「無駄口はここまで。アンタもさっさと食べな」

「はいはい。御馳になりますよ」

遅い夕食を済ませ、二人は消炭の残火を暖にして横になった。蒼き月と紅き月が天頂でようやく縁を重ねようとしていた。

「なあ、グレイ。眠ったのかい？」

エアリエスは何気なく…何故か問い掛けた。

「…ん。あ、いえ。微睡んでいた所でしたが…なんでしょ？」

「アンタはなんで人形遣いなんかになつたんだい？」

「…え？ え」と…」

(そんなことを気にするとはね…魔王も嫌いのようですし…まだ闇に心を喰われてはいない…ようですね。ならば…)

少女の言葉は…堕ちた白魔導師にある事を決意させた。

「あ、嫌ならいいんだよ。別に話さなくても…」

決意を…決意に揺らぎながらも応えた。

「…殺したんです」

「え？」

瞬刻の沈黙。

人形遣いを責めるかのような沈黙が…言葉の先を促した。

「我が師とある少女を…」

「…少女？」

「あ、いや、少女の命は奪ってませんけどね。もっと酷い事をしました」

「…どんな？」

愛しき殺意 5 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは5 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 6 (前書き)

グレイの過去が少女の記憶を…

愛しき殺意 6

「記憶を…記憶を消したんです。我が師と一緒に…ある術を使つて。光の…あ、いや。ある法具に彼女が所持できた事を伝える為だそうですけど…単に我が師が憶えたての術を使ったかっただけなのかもしれません…が、今となってはどちらとも…」

どくん…

再びエアリエスの頭の中で何かが鼓動を始めた。

「…それで？」

「それで、我が師と意志が疎遠になりました…ある高位術の鍛錬中に過ちを…意図的にね…間違えたんですよ。酷いでしょう？ それで我が師は消えてなくなりました。文字どおり、消えたんですよ…永遠にね…それで追い出されて…」

「いや、アタシが…聞きたいのは…」

「なんです？」

グレイは起き上がってエアリエスを見た。エアリエスは既に起き上がり両眼でグレイを見つめている。

(え？)

彼女の眼が両方とも碧い瞳に変わっていた。

同時に…改めて直視した彼女の左顔の深い傷痕。

(…という事は。やはり、あの時の…。つまり片方が紅くなったのですね。傷は左なのに。傷が闇に染まるのを引き止めている…のでしようねえ)

「アタシが…聞きたいのは…」

「なんです？」

「その…少女の…な…」

エアリエスは何かを言いかけて不意に頭を抱えて叫んだ。
「ああああああああああああああああああああ……」
そして…そのまま眠りについていった。

泥沼に沈むかのように…

何者かに気絶させられたように…

走っていた。 駆けていた。

押しつぶされそうな不安に急ぎ立てられるように。

木の上を。 梯子か何か…不安定な足場。

足を取られそうになりながらも。

駆けていた。

前に微かに浮かぶ人影。

二人…いや三人。

大人が二人。 もう一人は小さな子供。

女の子？

三人が叫んでいた。 呼んでいた。

その方向に向かって走っていた。

何故か後ろを振り向くと…長い棒…鈍く光る…杖？

…を持った少女が虚ろな眼でこちらを見ている。全力で走りながら…気になって立ち止まってしまった。

不意に足元が…消えてなくなった。

暗闇の底に落ちていく。

どこまでも落ちていく。

衝撃が顔に。

手を当てると流れ落ちる鮮血。

血が広がり、沼となり、海となり、身体を沈めていく。
なす術もなく沈んでいった…

4. 除霊

「…助けて。助けて…：…やん。…えっ？」

綿布の中の少女は自らの声に気づき、跳ね起きる。

焚火はあらかた消え、灰が淡い灼温を遺しているだけ。

その陽炎の向うにいる筈のグレイは…いなくなっていた。

(もう…出かけたのか)

朝霧の中。冷気が静寂を連れてエアリエスを一人、包み込んでいく。

物言わぬ霧が心の中に染み込んでくる。

「…また一人か」

小さな呟きが霧の中へと消えていく。

「おはようござ…うわっ！」

不意に後ろで響いた声に反射的にソードブレイカーを抜き、突き出したエアリエスは声の主がグレイと気づき安堵の溜め息を小さく吐いた。

「まったく！ 幽霊みたいなヤツだな」

「そりゃあ、人形遣いですから。あつと、ほら。岩殻葡萄の実を採ってきたよ。あれ？ 泣いていたんですか？」

言われて目尻を拭くと濡れた感触。

「…ああ。欠伸だよ」

その感触が…指先を濡らす感触の出来事が長い間、無かった事を無表情なままに思い出す。

「そうですね。それにしても冷えますね。まだ春は遠いようですね」

「春…か…」

季節を思う事も久しく無かった事をふと思う。

(いつから…そんな事も気にしなくなっただらろう?)

「さて、さっそく頂きましょう」

どさつと背負っていた呪紋様の木の箱を降ろして中からボロボロの聖絹で作られた袋から岩殻葡萄の実を取り出して焚火跡の隣に広げた。

「うん。渋味がまだ残ってますが、結構いけますよ。酒は大丈夫ですか?」

岩殻葡萄とは樹と間違えそうなツタ状多年草の実。古くから神への供物として用いられている。固い殻の中に酒のような果汁と柔らかい果肉が特徴。多く食べると毒。旅人の急場の飢えを防ぐ果実だった。

無邪気に頬張るグレイを静かな面持ちで見つめながらエアリエスは尋ねた。

「昨日：夕べ聞きかけた事は何だったんだい?」

「えっ? …ああ。アナタにその剣を預けたという…お婆さんの事なんですけどね」

「で、何?」

一つずつゆっくりと岩殻葡萄の殻を砕き、実を噛み締めながらエアリエスは質問を促した。

「え。…いや、なに。その方の右の頬に傷は無かったのかなあって…それだけなんですけどね」

「あつたよ」

「え?」

「逆さ十字の傷が在った。斜めにね。『生者の証しだ』と言ってたけど…それだけかい?」

「え。ええ。それだけです」

(やはりね)

右頬の逆さ十字の傷。「反逆の双剣術士」と呼ばれた兄妹の傭兵の妹に間違いない。

(…しかし、まだ老婆ではない筈…命を吸われたのか? あの剣に)

闇の剣 ～愛しき殺意～

「グレイは禍々しい鞘に収まっている剣を見つめる。
「じゃ…アタシも聞きたいことがある」

愛しき殺意 6 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは6 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

愛しき殺意 7 (前書き)

人形遣いは禁断の地へと踏み込む。少女の記憶の中へと…

「え？」

射貫くような視線にグレイは思わずたじろいだ。

(杖の…あの少女の事だろうか？)

身構えて言葉を待つ。

「その箱の中身は何だい？」

身構えたのが可笑しかったのか、くすつと笑いながら尋ねるエアリエスの無邪気な視線にグレイはふうつと息を吐出す。戯れに尋ねただけなのだろう。

(しかし…アレを見ても…いや)

戸惑いを剽げた態度に換えて応える。

「あ、いや。この箱の中は…生活の道具とかですか？」

グレイの応えにエアリエスは失笑した。

「嘘つけ。人形遣いがそんなに道具が必要な訳がないだろ？」

暫しの躊躇の後、グレイは覚悟を決めた。

「ははは。判ってましたか。コレの存在を…」

箱の中から綺麗な聖絹に包まれた塊を取り出した。

(思い出すだろうか…)

ゆっくりと包みを解くと…白銀の七字刃の金具。

金具は一見では判らぬ物だが武器を扱う者が見ればそれは薙刀の留金具だと判る。互いに締める七つ字の螺子が刃となっているのは珍しい。そして留金具と螺子刃には綺麗な金の象眼が飾られている。「コレはアナタの『闇牙』と同じく、人に渡してくれと頼まれた物ですよ。判りますか？」

何故か…頭に手をやりながらエアリエスは応える。

「ああ。薙刀の刃留金具だ。そのぐらい判る…さ」

(…判らないか)

グレイは落胆の息を自嘲の言葉へと換えて続けた。

「まあ。コレも一応、刃物の類なんで聖絹越しでないと持てませんから。こうして箱の中に仕舞っている訳です。どうです？ 持って見ますか？」

グレイに促されて手に取って見るとずしりと重い。細かい象眼が緩やかな呪紋を象っていたがそれは普通の武器に見られるような邪紋や呪紋ではなく白魔導師が持つ武器、棍や鈷杵、鈷鈴に描かれているという聖紋。

「これって不思議な…いいや、皮肉な品物…だね」

「そうですか？」

「人を刻む武器の一部なのに…聖紋だなんて…う」

「どうしました？」

「頭が…痛い…もう、いい。…仕舞って…くれ」

震える手で渡された留金具を箱に仕舞い、グレイは心配げに尋ねた。

「どうしたんです？ 毒に酔いました？ それとも持病ですか？ 治療しましょうか？」

「ふ…ん。やだ…ね。オマエに『治療』されたら命が削られるからね。ふう」

悪言と共に深く息を吐き、少女は…やっと落ち着いた。

「癒りました？」

「ああ。どうやらアタシは白魔導師関係の物には拒絶反応するみたいだね」

グレイはその理由が判っていた。それが彼女の過去の記憶に起因する事も。

（記憶を封印されている？ いや、やはり記憶を『鍵』としているようですね。難儀な…）

思いを別に飄々と応える。

「私も一応、白魔導師関係ですけどね？」

その言葉にエアリエスは無邪気に笑い声をあげた。

「きやはははは。アンタは破戒僧。白魔導師よりもアタシに近い人

形遣いじゃないか？」

「そう自分を卑下することはありませんよ」

真剣な面持ちで応えるグレイにエアリエスは笑いを止めた。

「人形遣いはこの世で最も穢れた存在なのですから。御判りでしょう？」

「……ごめん」

素直に頭を下げる少女の態度に……元白魔導師は自分の言葉の矛盾に気づいた。

「あ、いや。私の言っている事も矛盾してました。すみません」
素直に頭を下げるグレイ。

「え？」

「いやいや。お気づきになられなかったらいいんです」
「？」

人形遣いの言葉の矛盾に気づかず、少女は小首を傾げた。

「あ、あと一つだけお聞きしていいですか？」

似合わない真剣な面持ちでグレイは向き直った。

「なんだい？」

ゆつくりと息を深く吸ってからグレイは踏み込む。少女の記憶の中へと。敢えて……

「貴女の本名はなんですか？」

「……え？」

戸惑う少女。人形遣いは戸惑いを余所に更に踏み込んでいく。

「『エアリエス』というのは私の地方では『仮りの名前』という意味なんですよ。発音ではね。しかも貴女の名のスペルには別の意味があるんです」

「……や……メ……テ」

少女の顔が歪む。苦しみが浮かんでいくように……

「スペルに『否定』という語と『過去』という語が入っている。古のムーマ文字のスペルですけどね。その語を除くと、残るのは……」
「ヤメロ！」

突如としてエアリエスの両の瞳の色が血泥の様な深紅へと変り、
修羅のごとき形相でグレイを睨みつける。

髪も立ち上がり瞬く間に別人へと変貌し…闇の剣をすらりと抜き
構えた。

「出ましたね。憑物が」

不敵な笑みを浮かべてグレイはゆつくりと杖に手を伸ばす。その
手を狙うかのように鋭く剣圧がエアリエスから放たれた。襲い来る
闇の剣。その剣圧を杖で受け流すべく構えるグレイ…が、しかし次
の瞬間、グレイは杖を放った。

「ナニッ!？」

素手で剣の刃を受ける。鎧の下の腕や胴体をも軽々と斬り刻む刃
がグレイの腕を襲い…通り過ぎ…そしてグレイの腕は…何一つ傷つ
いてはいなかった。

「グ…キサマ…」

愛しき殺意 7 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは7/16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 8 (前書き)

闇の剣とは……

愛しき殺意 8

「驚く事はないでしょう？ 前の持ち主サマ。その剣の事はよくご存じの筈」

相手の事を一切気にかけずに放った杖を拾い上げ、パタパタと片手で埃を払う。

「その剣の別名は『邪志の剣』。古から伝わる『聖魔刀見聞録』という奇文書に記されたとおり、『斬りたいと思う物、それを防ぐものが思っていた物である場合はゼリーの如く切断するが、それ以外の物は』…つまり、考えていた物でない場合…」

言葉を待たずに脳天に振り下ろされる闇の剣。

その剣を蹴り上げるように靴底で受ける。

「…このとおり。『全く切れないという天邪鬼な性質を持つ硬質化した幽体の刃の剣』ですよねえ…」

杖を支えに別の足で蹴り上げる。体ごと樹の根元まで飛ばされる少女。

「要はアナタが斬りつける時にアナタが防がれると考えた物以外で受ければいいだけ。受ける物が思い描いた物ならばその背後に隠された物でさえ簡単に斬り刻む事ができるのですがねえ…矛盾したモノです」

少女は素早く起き上がり、力のままに人形遣いの胸を横に薙ぎ払う。抜き胴の剣の刃を受けたモノは…一枚の紙。

グレイが懐から取り出した呪符だった。

「駄目ですよ。憑依霊となったアナタの予想の裏をかく事なぞ人形遣いの私には造作もない事。ここは一つ、おとなしく…」

刃を受けた呪符を素早く少女の額に張りつけ小さく呪文を唱える。
「…成仏してくださいな。ねえ？ 反逆の傭兵の一人、ギリアさん？」

「ギイヤアアアアアあああ…」

叫び声と共に幽体が少女の身体から呪符と共に引き離され、呪符から伸びる細い光の鎖が幽体を縛り上げていく。

「やっぱりね。あ、そうそう。一つ聞きたいのですが…」

両手を拝むように擦り合わせながらグレイはギリアの幽体に聞いた。

「…アナタのお兄さんを殺したのは…アナタですよねえ？」

幽体は苦しみながら身を擦る。瞬間瞬間に人間の顔、魔物の顔に変化しながら。そして…人間の顔の時、美しく凛々しい淑女の顔に戻った時、小さく頷いた。涙を振り撒きながら…右の頬の逆十字の傷から血を滲ませて…

「そうですか。殺して闇の剣を引き継ぎましたか…。つまり、アナタも呪いをかけられていたのですね。闇の一族ですか？」

次の瞬間、一際に醜い魔物の顔に戻り、幽体はグレイに襲いかかった。幽体の首を無気味に伸ばして。首がグレイに噛みつこうとした瞬間、グレイの両手から瞬光の球体が放たれ幽体を粉々に砕く。「ふう。ま、魔物の考える事のほうがもっと簡単ですからねえ…。でも…」

グレイは気絶している少女を起こし、上体を樹に預けた。

「これで…この子への呪いが解けていたら…いいのですが」

両手で顔を支え上げ、親指でそっと目蓋を小さく開ける。その瞳の色は…

「…駄目でしたか」

片方が深紅。片方が碧眼。何一つ変つてはいなかった。

「さて…二つの幽体の除霊にはなんとか成功しましたが…」

タベのうちに一体、反逆の傭兵と呼ばれた剣士の一人である兄のグレイの除霊を終わらせていた。

「…随分と根が深いようですね。まあ、魔王の復活を阻む訳ですから簡単ではないでしょうけど…」

『闇の剣が人の魂を吸い続け、刀身が死に満ちる時、魔王が復活する』

闇の古文書に幾つか記されていた魔王を復活させる方法の一つ。

「まあ、闇の剣とやらがこの世に何本在るのかは知りませんが…」

古文書に記されたとおりならば、この少女や他の闇の剣を持つモノ達が殺戮に明け暮れ、魂を吸い続けた時に魔王が復活する。或いはこの少女や他の持ち主の魂が吸われる時に…魂が足りずに復活せずとも、少なくともその時が近づくのは確かだった。

絶対に避けるべきは…魔王の君臨。それが、過去の…少女との『約束』。

いや、それを別としても魔王の復活を見逃す事は出来なかった。

「いやはや…」闇の剣が光の杖の尼僧を刺し貫くとき、光は退き、魔王は君臨する』でしたっけか？ …闇の伝承文のどこまで本当か知りませんけどね。しかし…」

目蓋を戻し、少女の無垢な顔を見つめる。

「しかし…白魔導師を辞めた私が…このような役目を演じる場面にいくわすとは…ねえ。最初の一つの約束を果たすべく彷徨っていたのですが…」

自らの運命の疎ましさに自嘲する。

白魔導師という職自体に嫌気が差して辞めた自分が白魔導師の本懐といわれた魔王の出現の阻止に躍起になっている。

「皮肉な運命ですねえ。まあ…約束ですし。この子の運命に比べれば…。しかし、我ながら矛盾した約束をしてしまったモノです。さあて…」

ゆっくりと自らの迷いを断ちきる為にも呪詛を被う事を考え始める。とは言え…正直、幾つの呪詛を被えばいいのか。

「この魔剣を封じ魔王の復活を阻止する方法…一番、簡単なのは私がこの剣の運命に従い…剣を『引き継ぐ』事でしょうか。少なくともこの剣に関する分だけは魔王の復活は遅くなるでしょう…けどね」

一瞬、頭を過ぎる『最も簡単な方法』を即座に否定する。

「しかし、それでは…あの子との約束も、この子との約束も果たせなくなります…よねえ」

一つの約束を果たすために他の約束を反故にする。

「…駄目ですよねえ」

考え倦ねる元白魔導師を…突然、地の底からの声が嘲笑う。

「ソウサ。オマエゴトキニ我ヲノ願イヲ阻ム事ナゾ出来ヌ」

両の目をかっと思開き少女の顔が再び恐ろしい魔物へと変貌していく。

愛しき殺意 8 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは8/16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 9 (前書き)

闇の剣に取り憑いている悪霊を…

愛しき殺意 9

両眼は血のような深紅。口調はまるで地の底から響くような低い声。

「また…出ましたか。今度はどなたです？」

「グツグツグツ。名ヲ知ラネバ除霊デキヌヨウナ未熟ナ白魔導師ニ我ラノ呪詛ガ阻マレル訳ナゾ在ルマイ。サツサト立ち去ルカ…」

「『さもなければ闇の剣に血を吸わせる手伝いをしろ』でしょう？ 昨夜も聞きましたよ」

少女を樹に預けて、グレイは焚火跡を挟んだ反対側の樹にもたれて坐った。

「サスレバ、オマエノ命ヲ永遠ノ…」

「ああ。別にいいですよ。私は。伊達に人形遣いをやっている訳ではありませんから。あなた方、魔族に魅入られた方とか…いえいえ、例え魔族からでも私は命を吸い取る事ができますから。どうぞ、御気になさらずに…それより暫く黙って戴けませんか？ その闇の剣を封印する方法を…既に一つは思い付いてはいるのですが…他の方法を色々と考えているのですから」

苛立つのを隠すように樹にもたれて僧衣のフードを深く被って考える。表情以外の行動を取れない憑依した悪霊の話相手をしながら…

「…フフフフ。グウワハハハハハ」

「楽しそうですね？」

「ダークファンングヲ封印スル方法ナゾ無イ。例工封印シテモ我ラノ仲間ガ解呪スル。立ち所ニナ！ 貴様ノ如キ光の門番崩レニ如何ニ力出来ル代物デハ無イ。グウワハハハハ…」

「へえ。そうですね。私は『光の門番崩れ』ですか」

ニヤリと笑ってグレイは杖を持って立ち上がった。

「やはり貴方は霊になっても間が抜けてますね」

「ナンダト？ 取消セ！ 今ノ言葉ヲ取消サヌカ！」

「その反応。その言い回し。御自分が誰かを語っているのと同じだという事にも気づいておられないので？ エムル国の財務大臣、ザ Eid-sama？」

「ナ、…何故、判ツタ？」

「私とした会話ぐらい覚えておいてくださいよ。『光の門番崩れ』という罵倒はあの時のまんまですよ？」

「グ…」

悪霊は少女の身体をよたよたと操り、立ち上がらせ、闇の剣を手にし、構えた。

「貴方が闇に心を奪われていたとは…思いも寄りませんでしたよ。でも、これで合点がゆきましたよ。貴方が私の配した結界の外にワザワザ私兵を連れて出て行かれたのは…その剣に魂を捧げる為だったのですね？ いやはや、闇の方々の考えることはどうしてそんなに直情的なのでしょうかね？ 貴方の行動を理解できなかった私の不明を恥じるばかりです」

剣を構える相手にもせず、グレイは杖の手入れを始める。

「闇ノ神ヲ愚弄スルカ！」

「当然でしょう？ 崩れたとはいえこれでも元は白魔導師なのですから」

「許サヌ！」

真つ正直に打ち込む闇の剣を木の杖で受けようと構えるグレイ。

「馬鹿メ。コノ剣ノ威力ヲ知ラヌノカ！ ソンナ、タダノ木ノ枝ナゾ一刀両断ニ…」

がしっ

しかし、闇の剣は『ただの木の杖』を断ち切る事はなく、簡単に撥ね返された。

「ナニイ！ ソンナ馬鹿ナ…」

「馬鹿は貴方です。仮にも魔術師が『ただの木の枝』を杖にして持

ちますか？ これでもちゃんと霊精で表面を固めてあるんですよ。いざという時の法力の蓄えとしてね！」

素早く懐から呪符を取り出し額に張りつける。

たちまち呪符から伸びる光の鎖が霊体を縛り上げていく。

「ま、これも貴方が剣なぞ振るった事がないからこそ出来るのですけどね。仮にも剣術士の経験のある方ならば白魔導師が持つ杖の構造なんぞ御見通しでしょうから…ねえ？」

「グ…グオオオオオオ…ダガ、我デ終ワリト思ウナ！ 次二…」

「御遠慮申し上げます。貴方達の相手は疲れますから…という事で貴方は除霊致しませぬ。そうすれば彼女に過去を想い出させる必要もなくなりますからね。つまり『鍵』を封じさせてもらいますよ」
静かに人形遣いは念呪を練り始めた。

「ナ…二…？」

「御忘れで？ 私との約束を違えた時は私の意のままに一つ適えて下さる筈…」

「グ…ハ…ハ…死後二…マデ…残ル…約束ナゾ…在リハセヌ」

「はははは。私は人形遣い。約束は死後であろうと無かるうと魂在る限り有効なのですよ。ああ、そうそう。貴方の依頼を受けた御陰で私はこの子に逢う事が出来ました。それだけは感謝いたします。さて、謝辞を述べさせていただきますから、これで何の借りもない。心おきなく貴方の魂を使わせていただきますよ」

一方的に謝辞を述べる間も念珠の型をゆつくりと手繰り右手に法力を集めていく。

「ヒ、卑怯ナ…」

「『卑怯』！ 今の私には最高の誉め言葉を頂き、ありがとうございます
います」

左腕を胸に当て礼の形を取りながらも右手の指で悪霊の額に呪紋を刻み始めた。

「…貴方には『栓』になってもらいますよ。『鍵』を封印するため
の栓に。もう二度と彼女に…この剣に他の霊が取りつかないように

ね」

「グギヤアア……ナ……イ？」

「貴方達は剣の中に居られるのでしょうか？ 魂が吸い取られた状態で。まあ、一度に一体ずつしか御出にならないようです……貴方に栓になって頂ければ……煩わしい除霊に付き合う必要はないでしょう？ ああ、御心配なく。いずれ私よりもっと法力の高い光の杖を持つ若き尼僧が貴方達を根こそぎ除霊して差し上げる事になるでしょうから……」

愛しき殺意 9 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは9 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 10 (前書き)

少女は人形遣いに…

「グエエエエエ……」

グレイの言葉を待たずに悪霊は額の呪紋が描かれ終わると同時に右眼の赤黒い色の中に霞のように消えていった。後に脱力してグレイの腕に身を任せる少女を残して。

「光の杖を持つ尼僧か……。願わくば逢うことなく済むほうが望ましいのですが……」

光の杖を持つ尼僧。彼女への記憶が……。過去への記憶が『鍵』。

闇の剣を……。闇の力を解放するため剣の中の魔物が彼女を支配し、尼僧を襲うための鍵。

白魔導師崩れはそう確信していた。

(私如きの力で……。闇の『鍵』を完全に防げるとは思えませんし……)

「もう『鍵』を封印した以上……。思い出させるのも……。逢わせるのも……。最後の手段……。でしょうね」

矛盾した四つの約束。その全てを守るために。

何より、最も重要な約束……。魔王の復活を阻止するために。

「まあ、仕方ありません。コレで暫くは様子を見ましよう」

5. 疎まれし者

「いたたた……」

ゆつくりと歩きながらエアリエスは頻りに頭を軽く叩いている。

「まだ酒毒酔いが抜けませんか？」

先を歩くグレイは時折、振り返ってはエアリエスの様子を心配していた。

野宿した街道脇の森の中を発つて優に半日が過ぎ、既に夕刻。これでは今日中に辿り着く筈だった街には日が暮れるまでには辿り着けそうにない。それでも二人は樹が疎らに生えている草原の道を街に向かって歩いていった。

「まさか…ねえ。昼近くまでオヤスミになられるとは思いませんでしたよ。それならばそうと言って下されば、岩殻葡萄に脱酒毒の術を施しましたのに。しかし、たった数個の実で気絶なさるとは…よほど酒毒に弱いのですね」

事実を隠して飄々と話しかけるグレイの言葉には一仕事終えた安堵感が漂っていた。

「うるさいっ！ 人形遣いなんぞの手を借りてまで楽に生きようとは思わないのっ！」

悪態をつきながらも、睨む目に邪気がないのは痩せ我慢の所作だろう。

「はいはい。こんな人形遣いに関わったら命が幾つ在っても足りませんからね。どうぞ御自愛下さいませ」

軽くあしらいながら、グレイは楽しそうにゆっくりと歩いていく。その様子を…一層、軽くなったグレイの言葉の調子をも訝しげに見つめるエアリエスは…思いきって尋ねた。

「なあ…グレイ」

「なんでしょ？」

暫しの沈黙の後…少女は問う言葉を続けた。

「さつき、…変な事…しなかった？」

「え？」

ぴたりと歩みを止めてグレイは振り向きもせず聞き直した。

「今…なんと？」

その声は軽い怒りに浸っている。

「いや、昨夜といい、さつきといい、なんか気絶していた後で気持ちが悪くなったような…なんか変な…変な気分んだけど…だから！ 変な事をしたの？ しなかったの？」

ゆっくりと振り返って見る少女は顔を紅潮させて今にも消えてしまいそうだ。

グレイは…かつては僧籍に身を置く者として侮蔑に近い言葉と受けてしまった事を恥じ、目の前に居る者がそういう妙齢であった

事を今更ながらに思い出した。

…が、どのように応えていいのかはすぐには思いつかなかった。

「い、いや…何も…しませんでしたか？」

硬直したまま動揺を隠せず愚直に応えるグレイをエアリエスは不信の眼差しへと変えて睨む。

「いえ。本当です。本当に何も変な事とか怪しい事はしていません
つてば！ ええっと…そういえば…顔の傷の様子は見ましたけど…
ぶっ
」

顔面に少女の袋鞆を受けてグレイは後方に勢いよく倒れてしまっ
た。

「どうせ、顔にこんな傷が在ったら女とは認めてもらえませんか
ね！」

「いや、あの…そんな事はないと思いますよ」

「いいさ。こんな傷が無かったら…こんな事も、仕事も生活もして
いなかったかも…」

「違います！」

既に泣き顔になりそうなエアリエスの腕を掴み、引き止めてグレ
イは真顔で応えた。

「貴女の傷は…その傷こそが貴女を救っているのです。いずれ…ぐ
ぶっ
」

股間に鈍い衝撃。

その箇所を受けた蹴りの衝撃が全身を寸刻みに鈍器で叩き潰され
るような痛みに変るまでには…ほんの少しの時間だけが必要だった。
息をも継げずに転げ回るグレイを無視してエアリエスは誓った。

「決めた！ いつかこの傷を跡一つ残さず癒してやる。最高の白魔
導師に見て貰ってね。その為に稼ぎまくってやる！」

「いや…あの、そ…んなに気合を入れなくても…白魔導師の治療は
…基本的に…無料なんですけど…」

未だ転げながら、グレイは心の中で安心した。

（まあ、好い事です。生きる目標が在るうちは闇に心を奪われる事もないでしょう。…でも、やはり…あの傷は…癒さない方が…）

『栓』をしながらも出来には自信がない。ならば、今まで闇に吞まれるのを止めている傷は治すべきではない。どうやって説得しようかと考えたいのだが…

…今は痛みで思考が進まない。

「グレイ！ いつまで転げてんだい！ アンタに貸してた金も返してもらってからね。さっさと行くよっ！」

「え…はい。もう…ちよっと待って…」

愛しき殺意 10 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは10/16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 11 (前書き)

少女を襲ったのは…

なんとか立ち上がり、ひよこひよこ少女の後を歩き始める。

「あ、そうそう。もう一つ聞こうと思つてただけど…」

不意に立ち止まり、エアリエスはグレイに尋ねた。

「この剣つて何なんだい？ 知ってるんだろ？」

黒き剣をグレイに突き出し応えを求めるエアリエス。

草原を渡る風が少女の髪を吹き流し、左顔の傷を顕わにして右眼を隠した。左の碧の瞳だけがみつめている。

グレイは痛みを忘れて暫く動きを止めて考えて…応えた。

「…いいですか？ 思い出さないで下さい。新しく記憶して下さい。いいですね？」

覚悟したグレイは真剣な面持ちで少女に念を押し。

「…え？」

何の事か、何の意味か判らず、エアリエスは戸惑いの色を隠せない。

(思い出す？ 何を？)

「その剣が…その剣は『血を吸い地に死を満たした時に魔王、復活する』と幾多の古文書に記された魔剣の一つ。ある伝承文書には『あらゆる物を斬り裂き、大地をも、炎をも、大海をも、風をも両断し、総ての力を破壊する。そして天より顕れる光の…え』と、光の使者を破壊する時、魔王が全てを支配する』と…」

「魔王が復活…する？ 光の使者…を破壊する…この剣が？ 魔王？ 復活？ 光の…杖じゃなくて？ 尼僧…じゃなくて？」

虚ろな瞳へ…碧い左の瞳に黒き紅が差し…碧から深紫へ…さらに深紅へと変りかけ、少女は片手で顔を抑える。

(いけないっ！)

「させません！ 断じて！ 例え貴方を殺めようとも。決してっ！」
慌てて、繕う言葉に、不用意な例えを挟んでしまった。

「アタシを…殺す？ 殺す？ アンタが？」

深紫の虚ろな瞳が…碧く冷たい視線へと戻り…疑惑の影が差す。

「あ…いや。ただの例え話というか決意表明というか…形容句というか…ですが…」

グレイは碧き瞳に戻った事に安心しながらも『最も簡単な方法を思わず口にしてしまった事を後悔し、ただ狼狽えるだけだった。

「なるほど。判った」

昨夜までの無表情な冷たい顔に戻りエアリエスは静かに向き直った。

「え？」

「それで前から…エムル国から付きまとってたんだな？ 魔王を復活させない為に…」

「あ…いや。いえ…」

「違うのかい？」

無表情な顔でエアリエスは乞うような声でもう一度、問い直した。
「いえ…。いや、確かにそうですが…」

元白魔導師の言葉に…少女は瞳に失望を浮かべて…悔やむように閉じた。

「判った…わかった…もう、いい…」

くるりと背を向け、少女はゆっくりと歩みを始めた。

「結局、信じられるのは…自分だけということだな…」

「あ…エアリエスさん？」

応えず歩みを進める少女にグレイは追いつがった。

「違います。あなたが信じて…信じていいんです。あなたのこれまでの生き方を…これからも…これからの生き方も」

「退けっ！」

眼もくれず進むエアリエス。

「ちよつと、待って下さい…ぐっ」

前に回り込み、エアリエスの歩みを止めようとしたグレイの動きが急に止まった。

「…どうした？」

流石に不審に思いエアリエスが尋ねた時、グレイの口から赤黒い液体が零れ落ちた。そのまま崩れるグレイの背に数本の矢。

(敵！ いつの間につ！ 囲まれているっ！)

辺りを見回すと木々に隠れた兵士達がゆっくりと姿を現した。

兵装から軍事国家オーヴェマの魔兵士とすぐに判る。グレイに刺さっている矢羽根の一つにもオーヴェマの紋章が描かれている。

「な…に？」

既に幾多の国で賞金首とはなっていたが、オーヴェマではまだなつてはいない。しかも…その国、政府からの依頼を受けてレガス国のシュタイン將軍の言質を取りに行ったのだ。

「なんだ？ オマエ達は！ オマエ達から攻撃される謂はない！
アタシは…」

グレイを庇い前にでて両手を広げてエアリエスは叫んだ。しかし…彼女に向かって非情にも次の矢が放たれた。

かきん

「…え？」

矢が彼女の胸を貫く事はなかった。

既に張られていた障壁結界が軽い音と共に矢を撥ね返した。振り返るとグレイが地面に伏したまま術を放っている。

「駄目ですよ。仮にも傭兵のリストの上位に名を連ねようとする者が攻撃されて身を隠さないとは…評価ランクが下がりますよ…ぐふっ」

ゆっくりと血を吐きながら立ち上るグレイ。

支えようと走り寄るエアリエスはすぐに障壁に行く手を遮られた。

「え？ グレイ…あんた。障壁の中にいないじゃない…」

「ええ。咄嗟の事だったので…まあ、問題ありませんよ」

基本的に…白魔導師は障壁を同時には一つしか作れない。

従って障壁の外にいるという事は…彼自身が無防備な状態にある事を意味していた。

「早く、早くコイツを解呪して！そして、もう一度…」
障壁の壁を叩き、叫ぶエアリエス。しかし、グレイは冷静に応えた。

「駄目ですよ。彼らがその瞬間を見逃す筈がないでしょう？それに優秀な指揮官も御出でのようですし。ねえ…そうでしょう？シユタイン將軍！」

愛しき殺意 11（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは11 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 12 (前書き)

人形遣いとは不死：

愛しき殺意 12

グレイの言葉に促されるように一人の老将軍が遠くの大樹の影から姿を現した。警護の者を周りに引連れ、ゆっくりと進み出るその姿は…

「な…何故？ 将軍が…オーヴェマの軍装を…？」

ただ…信じられず見つめるだけのエアリエス。昨日、言質を取った時の将軍はレガス国の兵装だった…はず。

老将軍は伴の者に陣椅子を用意させるとゆっくりとそこに坐り静かに言った。

「そこな傭兵。我が国の要請に従い『仕事』を全うしたこと、誠に見事である」

仕事とは…老将軍の言質を取った事だろう。

「そこで貴様達には…『死』を褒美として授けよう」

不敵な笑いを浮かべながら将軍はゆっくりと慇懃に宣言した。

「何っ！ 何故だ！」

訳が判らず障壁の中で叫ぶエアリエス。

彼女にとって何一つ合点が行かない事であった。

「ふ…将軍。あなた…賭けの最後に御自身を賭けられたのでしょうか」

？ 最後に…賭けで失った領土を取り戻す為に？」

言葉が続けながら障壁に身を預けて将軍の居る方へとよろよろと歩むグレイ。

矢を一本ずつ抜き、動く度に透明な障壁に血糊で跡を残して…。

「くくくく。流星は人形遣い。世の中の仕組みというモノがこの小娘よりは判っているようだな」

陣椅子に威厳を持った姿で座る老将軍は眉一つ動かさずに人形遣いの動作を注視していた。

実際…将軍と賭けに興じていたオーヴェマの軍事参謀は、将軍を自らの陣営に引き抜く為に賭けにに応じていたのである。それは小国

レガスを出来るだけ簡単に陥落させる為だけの策略。

「そ…そして、恥を隠す為に我々の口を封じに来たのでしょうか？
違いますか？」

グレイは杖を支えにゆっくりと歩む。

將軍と少女の間の位置へと…庇うかのように歩む。

(武人が最も忌みするのは自らの誇りを貶める事。だが…それだけのために殺しに来ましたか…いや、或いは…闇の剣の?)

侮蔑と疑惑の言葉を呑み込み、事の次第への疑念だけを口にする。
「貴方は…オーヴェマの要請に従い、レガス国の将来を憂いて無駄な犠牲を払うのを避ける為に…身をオーヴェマに預けたと喧伝なさるのでしょう？ 違いますか？ 決して賭けに負けたという事ではなく…ねえ？」

杖と障壁を支えに立ち、この世で最も穢れた存在である人形遣いは將軍に問い質した。

「偽善だ…勝手な理屈だ…穢れている…」

障壁の中でエアリエスは呟く。

「はっはっははははは。そう。そのとおり！ 我が戦歴を、我が武を蔑ろにした政官共達め！ ひたすら略を巡らせて戦を避けて来ようとも、何れは何処その国の刃に伏す事になるのだ。ならば…我が手で腐った政官共を根絶やしにし、この手で我が国に永久の平和をもたらしてみせる。我が武運でな…」

立ち上がり両手で大仰な手振りを交えた演説を続けるシユタイン將軍にグレイが言葉で冷水を浴びせた。

「何をどう言い繕うとも『裏切り者』と言うでしょうねえ。全てを知っている者は…。それで、噂が広まる前に…彼女の『契約が完了した証拠』を消す為に来たのでしょうか？ あの契約の…『言質の魔石』を破壊する為に…」

グレイの言葉に喉を凍らせた將軍だったが、ゆっくりと凍った表情を綻ばせて静寂に叫んだ。

「流石じゃ。そこまで判っているのならば…」

さつと将軍が手を挙げると、弓兵達がグレイに狙いを定めて構えた。

「さらばだ。既にオマエ達はワシとは共に存在できぬ者となったのだからな。呪うならば自らの不運を呪うがいい。撃てっ！」

合図と共に数十本の矢が放たれ、グレイの身体を貫いた。

「あ……」

鈍い音と共に障壁に血飛沫が飛び散り、赤き壁となり少女の視界から人形遣いの姿を隠す。

「……え。そんな……人形遣いって……不死身じゃ……なかった……の？」

障壁の中で少女は呆然と血飛沫の向うを見つめていた。

どさつという低く鈍い音は身体が地面に落ちた音？

「グレイ……死んじゃったの？……グレイ？……グレイ……いいいい！」

少女の叫び声が草原に響き渡る。

「呼びましたか？」

ひょいと血飛沫の影から青白く痩せた男が顔を出した。

「な……大丈夫……だった……の？」

驚きを問いに換えるエアリエス。

「ええ。仮にも人形遣いの私が通常の武器で死ぬ訳がないでしょう？ 先程、不意をつかれたので法力を……いえ、呪力が溜まるまでちよつと時間がかかったというだけです」

「がいいん

障壁を叩く音が辺りに響く。

「てめえ！ 死んだと思っただじゃないか！」

笑いながら涙を流して少女は怒っていた。

「えつと……ちよつと待って下さいね」

グレイはくるりと身を返して少女に背を向けた。そこには……グレイの身を貫いた矢が十数本、血に濡れた矢尻を見せていた。

「……神の光よ。我が手に余る総ての災いを癒したまえ」

闇の剣 ~愛しき殺意~

低く呟く呪文と共にグレイは一気に総ての矢を引き抜く。

愛しき殺意 12 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは12/16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 13 (前書き)

不死である人形遣いの弱点とは…

途端に飛び散る鮮血が近くの草を赤黒く染め上げ…鈍く灰色に光ると即座にグレイの身体へと吸い取られていく。

「ふう…まあ、こんなものでしょ」

矢を引き抜いた時に千切れた服の下から無傷の身体が現れる。

「どうです？ 自らの傷を癒す白魔導師、『人形遣い』は貴方達のやり方では倒せませんよ？」

老將軍は小さく舌打ちして、眉を顰めた。

（確かに…白魔導師ならば自分の傷は自ら癒す事はできぬ。しかも障壁と治癒。二つの術を同時に使いこなすとは…ただの人形遣いというわけではなさそうだな）

人形遣いとはいえ元は白魔導師。グレイは白魔導師としてはかなりの使い手、いや、高僧だったのだなと老將軍は理解した。

「ふん。御主が不死というならば、狙いを変えるだけの事。…次の矢を」

老將軍は慌てずに、静かに次の攻撃を命じた。

「この矢は一味違うぞ。撃てっ！」

唸りを上げて、しかし、ゆっくりと進む紅い矢の正体をグレイは即座に見破った。

「障壁を貫く魔矢？ そう来ましたか」（狙いを私ではなく彼女に変えたという事ですな）

背後の障壁の中の少女の命を狙う魔矢…確かに破壊すべきはエアリエスが持つ魔石。

「…光の盾よ。呪紋を顕し魔を退けよ」

唱呪が終わると同時にグレイが触れた所から広がる障壁の表面に白く浮かぶ呪紋。

そして赤黒い矢が少女を包み護る障壁に到達すると…紅蓮の炎が障壁を包んだ。

襲い来たのは魔法の炎を鏃に封印させた魔矢。

予め封じられた呪法の炎が敵を貫くと同時に吹き上がる。軍事国家オーヴェマの得意とする呪法戦闘だった。

「え…？」

少女は為す術もなく障壁の中で事態を見つめているしかない。

瞬刻の後、急速に炎は衰えて消え…青白い痩せた男は何事もなく障壁の傍らに立っていた。

「申し上げたでしょう？ 私にはそのような『通常の攻撃』は一切無意味だと。狙いを障壁の中の彼女へ変えようとも…この障壁に物理攻撃はもちろん、魔法攻撃も一切通じませんよ。如何です？ 滅多にないでしょう？」

強がるグレイ。しかし、身体の端々に火傷の痕が見て取れる。だが、痕も見見る間に癒っていくのは不死身の証ともいえた。

（物理障壁に退魔呪紋を施す…常時と瞬時の術二つではなく、常時の術を二つ連続して使いこなし、更に自分を防御した？ いや、治癒したのだな。…若干、遅れたようだが。…なかなかやる）

老将軍は対峙する相手の力量に感心した。

障壁は大まかに二つに分類される。物理的な攻撃を防ぐ障壁と魔法攻撃を防ぐ障壁とに。同時に二つを防ぐ障壁を編み出せる者は極めて希である。障壁にもたれて人形遣いは飄々と挑発した。

「誰にも申し上げませんから、このまま撤退なさっては？ 穢れた人形遣いとギルドの仕事を請け負って生きている剣術士の言葉なぞ、誰も耳を貸しませんよ。ご心配なく。ああ、そうそう。将軍は故郷のレガスを攻めに行くのでしたね。どうぞ、そのまま進軍なさってくださいな。…さあ？」

片手を横後方にひらりと翻して、敵に撤退を促すグレイ。

しかし、将軍は身動き一つせずに陣椅子の上で薄笑いを浮かべている。

「…どうしました？」 相手の様子を訝るグレイ。

（まさか…知っているのか？ …だとすると、やはり闇の剣を奪い

返しに？ つまり…この闇の剣は…やはり、かなりのレベルということか？)

自身の危機よりも闇の剣へと心が動く。

「はっはははは。流石は堕ちた白魔導師、人形遣いなだけはある。二つの術を同時に使うというのも称賛に値する。だが…次の矢はどうかかな？」

合図と共に打出される魔矢は白く光っている。

(やはり『知っていた』かっ！)

「くっ…風よ。疾き風よ。我が身に纏い全てを弾け！」

唱呪の後、即座に疾風がグレイを包み、襲いかかる矢の軌道を変えていく。

…だが。

すざざざさつと鈍い音が障壁の中にも響く。

血飛沫を一つも出さずに総ての矢がグレイの身を貫き、薄汚れた光を残して姿を消した。

「それは魔術そのものを矢として具現化したモノ。味は如何かね？」

「グレイ…大丈夫なの？ 大丈夫だね？ グレイ？ 返事して！」

障壁の中でグレイを呼ぶ少女の瞳に映るのは…地に崩れ落ちていく男の姿。

「あ…流石に、三つ目の術は…完璧には…操れません…ね」

痩せ我慢の言葉を吹きながら崩れゆく男。

その皮膚に…魔矢が貫き消えた痕から灰色のシミがゆっくりと、しかし確実に広がっていく。

「これを…人形遣いの弱点を知っているという事は…闇に…闇へと心を奪われましたか…将軍」

遠く離れた陣椅子の上で将軍は醜く笑い、低い声が響き渡った。

「ぐわっはっはっは…まさか聖なる術、聖癒の…浄化の術で元白魔導師が、人形遣いが朽ちらせる事が出来るとはな！ しかも、ど

のように乱されようと必ず突き刺さる魔矢までもあるとは。流石は軍事国家オーヴェマの魔術顧問！ 総ての呪法を知っていると豪語するだけあるわい。ぐうわはっはっはっは…ハハハ」

顔の影、皺が醜く盛上がり別人へと変貌していく。

「…遠操…の術？ なら…ば…謀術の…使い手…闇の術…やはり…」
絶えそうになる息でグレイは障壁にもたれて最後の力を両手に集めようとしていた。

「闇に心を…闇の…一族の…方達です…ね」

その言葉に一番驚いたのは障壁の中のエアリエスだった。

「闇の…アレが闇の一族？」

いつも考えていた。

いつも思っていた。

いつも待っていた。

闇の一族。

それが…

「魔に…心を…奪われて、この世を…魔王…に捧げよう…と…する方々…それが…闇の一族…ですよ」

愛しき殺意 13 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは13 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 14 (前書き)

少女への殺意の意味とは…

「そんな…アタシ、知らなかった…」

頭を抱えてエアリエスは跪く。

敵を…老將軍を呆然として見つめながら。その様子を見てグレイは途切れる息で励ました。

「はは…当然…です。存在…を…知るのは…光…の…白魔導師…の高僧…だけ…ま、…私も…そこに…名を…連ねて…いたから…知っている…だけです…」

灰色の染みが全身を被い、グレイの姿を霞ませていく。

「どうして…どうして？ 知っているならどうして言ってくれなかったの？」

泣き叫びグレイを詰問するエアリエス。

それは問いの応えを求めたのではなくグレイの存在を確認する為
「門外…不出…なんですよ。白魔…導師の…高僧に…伝わる…伝説…ですから…」

エアリエスはグレイの言葉を想い出していた。

「『血を吸い地に死を満たした時に魔王、復活する』…剣に血を、いえ、命を吸わせたら…魔王が復活する…その時が近づく？ …なんて事を…アタシがそんな事を」

今まで、幾多の血を吸わせてきた事か。

自らの身を守る為とはいえ、何も知らなかった事とはいえ、自分の行為が…過去の自分を許せなくなっていた。

「大丈夫…です」

「何が？ 何が大丈夫なのよ！ アタシは…アタシが魔王を復活させようとしていたのよ！」

「だから…大丈夫…なんです。…今までの…少なくとも…私が…私と…出会って…からの…分…は、私が…消して…ましたから…それに…あなたは…あなたへの…呪いは…呪いの…幾つか…は昨夜…

封じ…ましたから…あなたが…闇に…囚われ…ない限り…生きて…
いる限り…魔王が…復活する…事は…ない…んです。だから…彼ら
が…あなたを…消し…に来たんです。…闇の…剣の…所有者を…変
える…ために…来た…んです」

一つの言葉を発する間にも、グレイの身体は霞んでいった。障壁
にもたれる身体の重みをも感じられなくなっていた。

「所有者を…変える？」

「グッククックククククク…ソウデスヨ。才嬢サン、アナタニ八用
ガ無ナクナツタンデス。折角ノ演出ヲ…ソノ男ガ台無シニシテクレ
マシタカラ」

既に別人へと変貌した將軍の顔が地の底から響くような声で二人
に死を宣言した。

「ダカラ、死ンデ貰イマス。御心配ナク。あなたガコノ將軍ニ殺サ
レレバ、我ラガ宝剣、闇牙ハ將軍ガ引キ継グコトニナリマスカラ。」

コノ戦好キナ性格。必ズヤ我ラノ期待ニ応エテクレルデシヨウ」

エアリエスの脳裏に浮かぶ老婆との出来事。

剣術を教わり旅をしながら、賊に襲われ…傷ついた老婆を『楽に
するために止めを刺してくれ』と言われ…その通りにしたことを。

エアリエスは敵の言葉と自身の記憶でグレイの言葉を理解した。

「アタシを殺して引き継ぐ…つまり、所有者を殺した者に闇の剣は
…取り憑くのね？ グレイ。ねえ？ そうなんでしょ？」

だが、グレイは応えず力なく笑うだけだった。

「あんだ…馬鹿だよ。アンタがアタシを殺すというのは…所有する
ため。闇の剣を…奪うため…なんでしょ？ 刃物が持てない身で…

闇の剣を持つとうというのかい？」

刃物が持てない者が所有者となる。

それは闇の剣にどのような変化をもたらすのか？

所有するのは魂を糧とする穢れた人形遣い。

だが、刃物を持つ事が出来ない元白魔導師が持つ。それは、彼ら
闇の一族にとって是となるか非となるのか…知が及ばぬ出来事。

無謀な賭けといえる。

だが…それはグレイ自身の命を賭けた…剩りにも危うい行為。

そして、今、エアリエスはグレイの言葉の意味が…真意が判った。それはエアリエスを殺し、自らも死を選ぶ事なのだ。

魔王の復活させる方法の一つを封じるための…命をかけて魔王の復活を阻止するという意味だと。

「クククク。貴女ハソノ男ニ幾ツモノ呪イヲ解カレテシマイマシタカラネ。ソレニ、ソノ薄汚イ男ガ纏ワリツイテハ剣ニ血ヲ吸ワセテハ賞エマセンカラ、コレデハ折角、機ガ熟シテイルトイウノニ…」
將軍は…いや、魔物は両手を握り締めて如何にも口惜しそうだった。

「…機が…熟す？」
未だに全てが呑み込めないエアリエスの頭の中に不意にグレイの声が響いた。はっきりと。

「数年前、光の杖の所有者が顛れたんです。誰も持ち得なかった光の杖を持つ者が…。それは『魔王が復活する時、復活した魔王を打ち倒す為に顛れる』という伝説どおりに。その伝説の言葉を…彼らの立場で逆に解釈すると…」

グレイは障壁からずり落ち、地に屈していた。

「魔王の復活…魔王が復活する時が近い？」

「ソウダ」

『そうです』

地から響く声と頭に響く声が同時に応える。エアリエスは頭を障壁の向うのグレイに近づけようと壁に押しつける。

『そんなにしなくても大丈夫ですよ。私の声は…遠声術は距離に係ありませんから』

「遠声術？」

やっとエアリエスは頭の中で声が響く事に気がついた。

『この術は奴らが將軍を操っている術の簡単なヤツです。御判りでしょう？ 闇の術とは光の術。つまりは白魔導師の術は全て闇の術へと変貌するんです。術者が使うまま…術者の気分…その時の嗜好によってね。だから…人形遣いは…』

「人形遣いが…嫌われるのね？」

『そう。その時の気分次第で闇にも光にも姿を変え、人を惑わす。だから…私は…』

愛しき殺意 14 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは14 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 15 (前書き)

少女の反撃が始まる…

愛しき殺意 15

エアリエスは 그레이の言葉を全て理解した。

エムル国のギルドで出会ってからの敵となり、相手を悉く癒してきた行動の意味を。

그레이が人形遣いとなりながらも闇ではなく光の中に生きてきた事を…

「わかった。わかったから、力をあげる。アタシの命をあげるから…だから魔王の復活を阻止して。アイツらを…闇の一族を…そして…あの子が…帰って…」

あの時の約束を自ら口にする。無意識のうちに…自らの過去を…

そして望んだ。

自らの死を。

人形遣いからの…元白魔導師からの穢れ無き殺意を…

少女の碧き瞳から溢れる涙。

紅き瞳は…同じく涙が。

赤黒い深紅ではなく…今は透きとおった真紅と輝く瞳からも穢れなき涙が溢れていた。

(過去を…少し思い出しても変わりませんね。少しは『栓』が役に立っているということでしょうか?)

力なく笑う。

悔い無き笑顔で。

元白魔導師は自分の『仕事』が無駄では無かったことを確認し、覚悟を決めた。

그레이の穢れ無き笑顔を見たエアリエスは確信した。

逃げまどう。

総ての敵は抗う術もなく打ち倒されていく。

鮮血の中…

夜叉の如く、凄惨なる表情のままに剣を振るう。縦横無尽に…
総ての手向かいは無駄。

打ち合う剣を摺り抜け、少女の刃が敵を切り裂く。

鎧は紙の如く、兜も布の如く、切り裂き、断ち割れていく。

少女は今や…鮮血の舞台上で踊る、地獄の夜叉。

闇の剣に打ち倒されていく。

敵にとって、それは本望だったのかもしれない。

だが…剣が血を吸う事はなかった。

光が…聖なる眩い白い光が闇の剣を包み、エアリエスを包み、総ての穢れから彼女と剣を包み守っていた。

血煙のような夕闇が辺り一面を包み、そして…二つの月が天頂で幾分か重なった蒼と紅の光を草原に降り注ぐ頃には…草原で動くものは何一つ無かった。

ただ…血と屍の中で、白き光の珠に包まれて踞り泣きじゃくる一人の少女だけを…重なっていく蒼き月と紅き月の光が照らしていた。

無垢なる少女の姿を…紅く、蒼く、照らしていた。

愛しき殺意 15 (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

これは15 / 16話目です。

投票、感想など戴けると有り難いです。

闇の剣 ～愛しき殺意～

愛しき殺意 16 (最終話) (前書き)

少女は旅立つ。殺意を求めて…

愛しき殺意 16 (最終話)

5. 愛しき殺意

翌朝。

日の光が草原に夜明けを告げていた時、少女は近くの崖上で座っていた。

人形遣いが持っていた呪紋様の木の箱。それに身体を預け、膝を抱えて座っていた。

膝を抱える手には土汚れ。

草原からその場所に繋がる血の痕。

その先に盛上がった土の墓。

墓の頂にはボロボロに変わり果てた木の杖が墓標として立っていた。

杖の影が少女の顔にかかり、流れ落ちる涙を隠していた。

「だめじゃん」

無表情な顔のまま少女は呟いた。

「アタシを殺すんだろ? …魔王の復活を…阻止するために」

影が顔から外れ、涙が光を虹色に反射する。

「殺す前に…死んじゃったら…駄目じゃん」

顔を腕で隠し、言葉を続ける。

「アタシを殺せないよ。…ねえ、そうだろ?」

崖下からの風が杖を揺るがせ、少女の髪を撫でた。

「…アンタのさ。…荷物さ、アタシが預かるよ。なんだっけ? 人に渡すんだよね? あの留め金。誰だっけ? …誰に? 誰に渡したらいいんだよっ!」

手元の土塊を掴み、思いつきり杖にぶつける。

「馬鹿野郎! 誰だか判らないじゃないさ! なんにも…何一つ教えないでっ!」

土塊は杖にあたつて、砕けて四散した。

「まあ、いいさ。アタシが生きている限り、魔王は顕れないんだよね？ そうだよな…」

立ち上がり、土埃を払い、箱に手をかけようとした時、箱の上の数枚の木の葉がクルクルと舞い始めた。

見ると箱の蓋の呪紋が朝日を浴びて眩く光っている。

「…ん？」

なんとなく見つめるエアリエス。やがて木の葉は人形となり言葉を発した。

『この人形を貴女が見ているという事は…』

その声は…

「グレイ！ 生きてるの？」

しかし、それは木の葉の人形を操る声。

『私が貴女に取り憑いた悪霊の除霊に失敗したということですか。残念ながら。ところで身体の調子はどうですか？ もし、どこか傷むようでしたら…』

つまりは…グレイの残した思念。

昨夜の除霊を行う前に予め残していた言葉だった。

「なんだ…心配性なヤツ…馬鹿な…馬鹿なヤツ」

笑い声の少女の顔は泣いていた。

『…そうそう。貴女の剣…闇の剣には私の命が…この身体の命が尽きる時に呪いをかけさせて頂きます。その呪いとは…』

不意に後ろの草原が天にまで届くような光に包まれた。

「え？」

見ると斬り捨てられた者たちが蠢き始めていた。

素早く剣を構えるエアリエスにグレイの声が諫めた。

『…一切、殺生ができません。総ての傷は跡形もなく癒ります。だから、人殺しなどの仕事は今後、出来ません。いいですか？』

剣を構えながら木の葉の人形にエアリエスは舌を出して悪態をつ

く。

「べーっだ。今までだって受けてませんよおっだ。そんな仕事」

『そして、生き返った者達は切られる前後…そうですね。数日間の記憶は無くなっていますから慌てて斬らないように。邪気も幾つか消えてしまいます。少なくとも貴女に関する記憶は全て無くなっています。ああ、そうそう。ついでに貴女の姿を見たら逃げ出すようにしておきましょう。だから、その者達を斬る必要はなくなりますよ。永遠にね』

「へ？」

ふらふらと草原を歩き出す兵士達。

何が起こったのか、起きていたのか判らず、ぼんやりと自分達の姿を見ている。

その中にはあの老將軍の姿もあった。

將軍と敵兵達は草原のはずれで自分達を睨み見るエアリエスの姿を認めると…畏怖と恐怖の表情となり…悲鳴を上げて一目散に逃げ出し去っていった。

「…凄い」

感嘆するエアリエスを余所に人形は言葉を続ける。

『…それにしても、貴女は御強い。普通の剣を振るっただとしても一角の剣士とて齒が立たないでしょう。但し、強いからと言って何処かの軍勢に身を投じてはなりません。古の格言にも『武に耽る者、武を疎う者。両者は滅者の典型なり』と申します。貴女を陣営に引き入れようとする者はそのどちらかです。決して自壊の道を歩む者達に手を貸してはなりません。いいですか？』

「はいはい」

箱に両腕を突き、両手で顔を支えて木の葉の人形の言葉と仕草を見つめ続ける。

一点の曇りもない笑顔で。

『それから…私の箱の中の荷物なのですが…』

真顔に戻り、少女は耳をそばだてた。

『私が…私が復活するまで預かって下さい』

「え？」

少女は耳を疑った。

「復活するの？ いつ？ どこで？ どうやって？」

問いには応えずに…ただ人形は記録された言葉を続けた。

『…とはいっても、以前の私ではありません。私自身が復活するか、私の人形達が私の意志を…継ぐというよりは乗っ取られてですが、貴女の前に現れます。でも…』

「でも？ でも、何？」

『姿は当然違います。仕草も、声も違うでしょう。運良く私自身が復活しても記憶はそれなりに無くしています。それでも、いつかは貴女の前に現れます。その時の合図は…』

不意に箱の蓋の光が消え、木の葉の人形は塵へと変わり、風に散っていった。

「あああああ…まって。待てたら…」

箱に掛かっていた術の法力が尽きて消え、言葉は失われた。

暫く少女は吹き去っていった風の行方を見つめていたが、くすりと笑って呟いた。

「合図か。…合図なんて要らないだろ？」

木箱を担ぎ上げて呟く。

「この顔の傷は…癒さずしておくよ。そっちが見つけやすいように目印としてね。この傷を見たら…」

少女は墓に向き直るとにっこりと笑った。

「…アタシを殺しに来るんだね。覚悟しな。返討ちにしてあげるから」

そして少女はくるりと背を向けて、街道を歩き始めた。振り返ることなく。

自身への殺意を求めて…

墓標の杖から葉芽が伸び始めた事を知らずに…

(終了)

愛しき殺意 16 (最終話) (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

光と闇の挿話集としては短編の2作目になります。

最終話となりました。

投票、感想など戴けると有り難いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7534d/>

闇の剣 ~ 愛しき殺意 ~

2009年7月1日21時18分発行